

【審査論文】

女子青年における親に対する感謝の心理状態の短期縦断的検討

池田幸恭

The short-term longitudinal study of gratitude toward parents
in female adolescents

IKEDA Yukitaka

要旨

本研究の目的は、女子青年における親に対する感謝の心理状態の変化について、1年間の短期縦断的検討によって明らかにすることである。千葉県内の私立女子大学における女子大学生96名へ、1年間に4時点の質問紙調査を2012年度から2015年度までの複数年度で実施した。分析の結果、次の3点が示された。第1に、各時点の親に対する感謝の心理状態に関する得点を投入変数としたクラスター分析を行い、母親と父親の双方について、親に対する感謝を素直に感じている群、すまなさを伴う親に対する感謝を複合的に感じている群、親に対する感謝を葛藤しながら感じている群、親に対する感謝よりも親から被害を受けたと感じている群という4種類のクラスターに回答者が分類された。第2に、分類された親に対する感謝の心理状態の推移について、「変化なし」、「一方向的変化」、「双方向的変化」、「混在的变化」という4種類にまとめられた。母親に対する感謝の心理状態の推移を分析した88名のうち52名(59.1%)、父親に対する感謝の心理状態の推移を分析した85名のうち38名(44.7%)が「変化なし」であり、すべての時点で同じ群に分類された。第3に、母親に対する感謝の心理状態の推移と父親に対する感謝の心理状態の推移との間に有意な連関はみられず、母親と父親で親に対する感謝の心理状態の変化過程は異なると考えられた。また、親に対する感謝が変化した体験として、親子関係、人生の節目、社会とのつながり、自分の成長という4種類の内容が見いだされた。以上より、女子青年の親に対する感謝の心理状態は普段の生活の中で揺れ動きながらも各クラスター群で示された安定した状態に立ち戻るが、この安定性には個人差があり「一方向的変化」、「双方向的変化」、「混在的变化」のように1年間で変動している場合があることも示唆された。

キーワード：親に対する感謝 (gratitude toward parent)、感謝 (gratitude)、縦断研究 (longitudinal study)

問題

青年が親から自立していく中で、親に対する感謝の気持ちを抱くようになることが指摘されている(西平, 1990)。平木(1994)は、親との“結びつきと分離が、青年の自立性と親との親密さを両立させるようなものであった時、それは明確に「恩愛を受けていることに感謝する」気持ちとなり、親と子の心の絆として意識される”と論じている(p.17)。Grotevant & Cooper(1985, 1986)は個性化モデルを提唱し、独自性と結合性の2つの次元から親子間のコミュニケーションをとらえている。Santrock(2012)

も、親子関係の新しいモデルとして愛着と自律性の両方を重視している。このように親との結びつきと親からの分離の両立が青年期の親からの自立にとって重要であり、その両立に親に対する感謝は関係すると考えられる。また、村瀬（1996）は心理療法の一種である内観法の事例をとおして「内観的自己同一性」という概念を提唱し、“内観は各自の自己同一性の確立を、両親を中心とする他者の恩恵の認知をとおして促進する働きをもつものである”と論じている（pp.158-159）。青年の親からの自立も、親からの恩恵の認知をとおして進むことが予想される。これらのことから、親に対する感謝について説明することは、青年期における親からの自立を理解する上で有意義であると考えられる。

池田（2006, 2018）は、“親に対する感謝”を“わたしは親からの恩恵を受けていると感じること”としてとらえ、母親に感謝しているときに感じる気持ちとして「援助してくれることへのうれしさ」、「産み育ててくれたことへのありがたさ」、「負担をかけたことへのすまなさ」、「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」という4種類の気持ちと「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」の組み合わせから親に対する感謝の心理状態を検討している。池田（2018）では中学生、高校生、大学生の母親に対する感謝の心理状態について、すまなさを伴う母親に対する感謝を複合的に感じている群、母親に対する感謝を素直に感じている群、母親に対する感謝を葛藤しながら感じている群、母親に対する感謝よりも母親から被害を受けたと感じている群という4種類のクラスターを見いだしている。そして、母親を一方向的にたよりにするだけでなく自分も母親を支えようとするというかわり方は同じでも、母親に対する感謝に負担をかけたことへのすまなさを伴う場合とそうでない場合で異なる青年の心理状態がみられることが示されている。しかし、青年が親に対する感謝を感じる心理状態がいかにして変化するかについては、十分に検討されていない。

三宅・陳・氏家（2004）は、新たな発達研究の方向性として、可変性と非線形性の問題を前提とすることの必要性を論じている。そして、“非線形性や可変性という特徴を持つ発達現象を説明するためには、発達軌跡や発達プロセスで起こる個人とさまざまな要因との時間軸上で展開される複雑な相互作用を個人ベース（クラスターベース）で見なければならぬ”としている（三宅他, 2004, p.134）。ここでは、“時間の経過にともなって変化するシステムを記述し、説明する理論”であるダイナミック・システムズ・セオリー（dynamic systems theory；DST）も参考になる（杉村, 2014, p.109）。Kunnen & van Geert（2012）を参考にすると、ダイナミック・システムによるアプローチ（以下、DSA）の特徴として、反復性（iterativity）、非線形性（non-linearity）、自己組織化（self-organization）、そして多水準の時間単位の相互作用が指摘できる¹。また、Thelen & Smith（1994 小島監訳 2018）は、“システムが、ある秩序パラメーターの影響のもとで自己組織化するとき、その挙動は、システムがあらゆる可能なモードから選好した1つ、ないしいくつかのモード（それら自体が非常に複雑なものでありえる）に「落ち着いてゆく」とし、こうした挙動のモードを“アトラクター状態であり、システムが、ある条件下でそのような状態に引き寄せられていくこと”を論じている（p.81, p.82）。

このようなアトラクターの特徴として、ボスマ・クンネン（杉村報告 2015）は心理学研究における“安定したパターン、スタイル、そして特性”を挙げて解説している（p.224）。このように安定したパターンを示す「アトラクター」の概念について、本研究では池田（2018）が母親に対する感謝の心理状態について見いだした、すまなさを伴う母親に対する感謝を複合的に感じている群、母親に対する感謝を素直に感じている群、母親に対する感謝を葛藤しながら感じている群、母親に対する感謝よりも母親から被害を受けたと感じている群という4種類のクラスターが対応していると考えられる。

以上の議論を踏まえると、親からの自立を検討する上でも、多様な発達過程を考慮する必要があるとい

える。本研究では、女子大学生における親に対する感謝の心理状態について個人の発達経路に着目し、1年間に4時点の調査を行う。親に対する感謝の変化過程をとらえる上で3時点以上の回答を分析することが有効であり、回答者の負担も考慮して4時点の調査を設定する。1年間にわたって調査を継続することを踏まえて、調査協力者との丁寧なやり取りや配慮が可能となるように、筆者の授業を履修している女子大学生に調査の協力を依頼する。特に就職活動などが本格化し、大学卒業後の親からの自立への意識が高まると考えられる大学3年生、4年生へ調査を実施する。池田（2006, 2018）では女性と男性へ調査を実施しているが、女性は男性に比べて感謝を感じることや表明することに葛藤や抵抗が少ないことが指摘されている（Froh, Yurkewicz, & Kashdan, 2009）ことから、本研究では女子青年に焦点化して研究を進める。また、池田（2014）では20代から50代までの成人期を中心に母親と父親の双方に対する感謝の心理状態を検討し、女性が父親と普段会う頻度と「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」に正の関連が、母親と普段会う頻度が中程度であることと「生み育ててくれたことへのありがたさ」、頻度が多いことと「負担をかけたことへのすまなさ」に正の関連がみられることを報告している。女子青年における母親と父親それぞれに対する感謝の心理状態についても、異なる特徴がみられることが予想される。本研究では、池田（2006, 2018）で検討した母親に対する感謝とあわせて、父親に対する感謝についても調査を実施する。このことで、親に対する感謝の心理状態の変化について、母親と父親の双方を比較して検討することができる。

目的

本研究の目的は、女子青年における親に対する感謝の心理状態の変化について、1年間の短期縦断的検討によって明らかにすることである。母親に対する感謝と父親に対する感謝の両方について、1年間に4時点の調査を実施し、以下の3点について研究を進める。

第1に、母親に対する感謝の心理状態について回答者を分類し、その推移を確認する。第2に、母親と同様に父親に対する感謝の心理状態について回答者を分類し、その推移を確認する。第3に、母親に対する感謝の心理状態の推移と父親に対する感謝の心理状態の推移の特徴について、双方の関係を検討する。あわせて、女子青年が認識している親に対する感謝が変化した体験についても検討する。

方法

調査回答者

千葉県内の私立女子大学で筆者の3年次ゼミと4年次ゼミを履修する女子大学生96名に調査を実施した。第1回の調査時点の平均年齢は20.73（20-23）歳であった。

調査時期および手続き

1年間に4時点の質問紙調査を2012年度から2015年度までの複数年度で実施した。第1回は4月末から5月上旬、第2回は7月末から8月上旬、第3回は10月末から11月上旬、第4回（最終回）は1月末に、約3ヶ月間隔でおこなった。一人の回答者は、1年間に最大で4回の調査へ回答することになる。

調査にあたっては、調査への協力は任意であり協力しないことで不利益を被ることはないこと、調査への回答の有無が授業成績に関係しないこと、質問紙への回答をもって調査協力への同意が確認されることを説明した。希望があった場合は、回答者自身の1年間の調査結果をフィードバックした。

また、親子関係は必ずしも血縁関係に限らないことに配慮して、「親」「父親」「母親」という表現が出

てきますが、必ずしも血縁関係上にある親をさしているものではありません。「親」「父親」「母親」と聞いてあなたが思い浮かべる人物について、各質問にお答えください。”と教示した。

調査内容

親に対する感謝の心理状態 「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」、「負担をかけたことへのすまなさ」、「自分が苦勞しているのは親のせいだと感じる気持ち」という5種類の気持ちについて各4項目から構成される20項目（池田，2014）に、母親と父親それぞれについて尋ねた。“普段、あなたと母親（あるいは父親）との関係で、以下の文章の内容が、どの程度あてはまりますか。”という教示のもと、「全くあてはまらない」（1点）、「あまりあてはまらない」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「ややあてはまる」（4点）、「非常にあてはまる」（5点）の5件法で回答を求めた。父親に関する質問に続けて、母親に関する質問をおこなった。

親に対する感謝が変化した体験 第1回は今までの、第2回以降は前回の調査時期からの親への感謝の気持ちに変化した体験について、a. 出来事、b. 変化の内容、c. 変化した理由、d. その体験をとおし感じたことや考えたことへの記述を求めた。親に対する感謝が変化した体験には母親と父親で異なる場合と同時に変化が生じる場合があると考え、“父親への感謝でも、母親への感謝でも、あるいは両親への感謝についてのいずれでもかまいません。”と教示した。体験が思い浮かばない場合には、「思い浮かばない」と記述してもらった。

また、誕生月日と血液型を尋ねて、回答のマッチングをおこなった²。本研究の分析に用いた統計パッケージは、SPSS Statistics 25.0であった。

結果

母親に対する感謝の心理状態に関する分類と推移

母親に対する感謝の心理状態に関する5種類の得点について、4回の調査における各時点の α 係数は $\alpha = .88$ to $.95$ であり、十分な信頼性係数が得られた。

4時点すべての母親に感謝しているときに感じる4種類の気持ちと自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ちを一括して投入変数とし、K-means法によるクラスター分析をおこなった。その結果、池田（2018）と同様に解釈できる4クラスターに分類された（Table 1）。第1クラスターは、母親に感謝しているときに感じる4種類の気持ちの得点が平均値より大きく、負担をかけたことへのすまなさを伴うことから、「すまなさを伴う母親に対する感謝を複合的に感じている群（複合）」と解釈された。第2クラスターは、母親に感謝しているときに感じる4種類の気持ちがすべて平均値および得点可能範囲の中間値である3.00よりも小さく、自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる傾向がみられることから、「母親に対する感謝よりも母親から被害を受けたと感じている群（被害）」と解釈された。第3クラスターは、母親に感謝しているときに感じる気持ちは平均値より小さいが得点可能範囲の中間値である3.00を超える得点を一部で示しており、母親に感謝しているけれども、自分が苦勞しているのは母親のせいだと母親を責める傾向もみられることから、「母親に対する感謝を葛藤しながら感じている群（葛藤）」と解釈された。第4クラスターは、負担をかけたことへのすまなさを感じる程度が平均値および得点可能範囲の中間値である3.00より小さく、母親に感謝しているときに感じる気持ちの一部で平均値より大きい得点がみられることから、「母親に対する感謝を素直に感じている群（素直）」と解釈された。

Table 1 母親に対する感謝の心理状態による回答者の分類

クラスター番号 度数 (N = 345)	1 (150)	2 (38)	3 (106)	4 (51)	全体の 平均値 (SD)
援助してくれることへのうれしさ	4.40 (0.59)	1.99 (0.71)	3.17 (0.77)	3.00 (1.15)	3.54 (1.12)
生み育ててくれたことへのありがたさ	4.81 (0.32)	2.80 (0.81)	3.69 (0.70)	4.18 (0.76)	4.15 (0.90)
今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち	4.71 (0.40)	2.66 (0.88)	4.02 (0.52)	4.26 (0.68)	4.20 (0.83)
負担をかけたことへのすまなさ	4.45 (0.59)	2.57 (0.86)	3.84 (0.60)	1.94 (0.71)	3.69 (1.12)
自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち	1.56 (0.68)	3.39 (1.02)	2.47 (0.85)	1.30 (0.41)	2.00 (1.00)
クラスター名	複合	被害	葛藤	素直	

注) クラスター番号下の人数以外の数値は、平均得点 (SD) である (得点範囲 1.00-5.00)。各得点の平均値より大きいものを網掛けして太線で囲んだ。4 時点の各得点を投入変数としており、同一クラスターに同一回答者の異なる時点の回答が含まれている場合がある。「複合」は「すまなさを伴う母親に対する感謝を複合的に感じている群」、「被害」は「母親に対する感謝よりも母親から被害を受けたと感じている群」、「葛藤」は「母親に対する感謝を葛藤しながら感じている群」、「素直」は「母親に対する感謝を素直に感じている群」を示している。

4 時点の調査に 3 回以上回答した 90 名のうち、母親との関係に未回答あるいは欠測値のあった 2 名を除いた計 88 名の回答を検討した。母親に対する感謝の心理状態の推移は、「変化なし」(52 名, 59.1%)、「一方向的変化」(17 名, 19.3%)、「双方向的変化」(15 名, 17.0%)、「混在的变化」(4 名, 4.5%) の 4 種類にまとめられた (Figure 1, Table 2)。「変化なし」はすべての時点で、母親に対する感謝の心理状態に関する同じ群に分類された回答者であった。「一方向的変化」は、母親に対する感謝の心理状態に関する群の種類にかかわらず、一方の群からもう一方の群へ変化した回答者であった。「双方向的変化」は、母親に対する感謝の心理状態に関する 2 種類の群を行きつ戻りつするものであり、一方の群からもう一方の群へ変化した後に元の群に戻る場合あるいはさらにもう一方の群へ変化した場合の回答者であった。「混在的变化」は、母親に対する感謝の心理状態に関する群の種類にかかわらず、3 つ以上の群がみられた回答者であった。

父親に対する感謝の心理状態に関する分類と推移

父親に対する感謝の心理状態に関する 5 種類の得点について、4 回の調査における各時点の α 係数は $\alpha = .85$ to $.94$ であり、十分な信頼性係数が得られた。

4 時点すべての父親に感謝しているときに感じる 4 種類の気持ちと自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる気持ちを一括して投入変数とし、K-means 法によるクラスター分析をおこなった。その結果、母親に対する感謝の心理状態と同様に解釈できる 4 クラスターに分類された (Table 3)。第 1 クラスターは、父親に感謝しているときに感じる気持ちの一部は得点可能範囲の中間値である 3.00 を超える得点や平均値より大きい得点を示しており、父親に感謝しているけれども、自分が苦労しているのは父親のせいだと父親を責める傾向もみられることから、「父親に対する感謝を葛藤しながら感じている群 (葛藤)」と解釈された。第 2 クラスターは、父親に感謝しているときに感じる 4 種類の気持ちがすべて平均値および得点可能範囲の中間値である 3.00 よりも小さく、自分が苦労しているのは父親のせいだと感じる傾向が

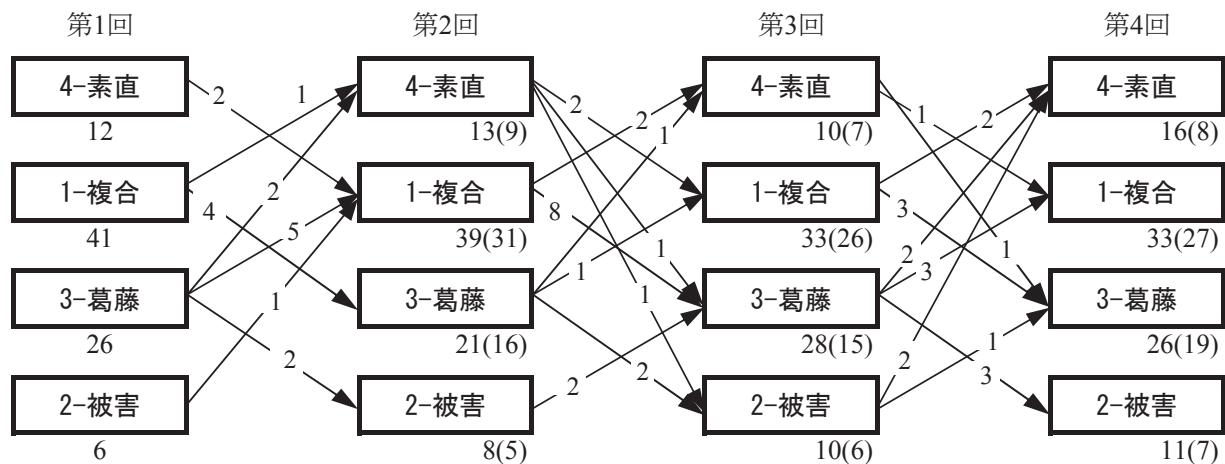


Figure 1 母親に対する感謝の心理状態の推移

注) 母親に対する感謝の心理状態の各群は、「自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ち」の得点に基づいて並び替えている。各心理状態の下にある数値は人数、()内は前時点と同一の群に分類された人数である。矢印の数値は、分類された群が変化した人数である。同一の群間の推移を示す矢印は省略した。

Table 2 母親に対する感謝の心理状態の推移 (N=88)

カテゴリー (n, %)	概要	具体例 (n)
変化なし (52, 59.1%)	安定した1つの群が継続する	1- 複合 (27) 2- 被害 (4) 3- 葛藤 (13) 4- 素直 (8)
一方向的变化 (17, 19.3%)	他の群へ 一方向に移行する	1- 複合→3- 葛藤 (7) 3- 葛藤→2- 被害 (4) 1- 複合→4- 素直 (1) 3- 葛藤→4- 素直 (1)
双方向的变化 (15, 17.0%)	2つの群を 行きつ戻りつする	1- 複合→3- 葛藤→1- 複合 (3) 4- 素直→2- 被害→4- 素直 (2) 4- 素直→1- 複合→4- 素直 (1) 3- 葛藤→4- 素直→3- 葛藤 (1) 2- 被害→3- 葛藤→2- 被害 (1)
混在的变化 (4, 4.5%)	3つ以上の群が みられる	1- 複合・2- 被害・3- 葛藤 (2) 1- 複合・3- 葛藤・4- 素直 (2)

注) 同様の心理状態に関する群で変化の順序が異なる推移の具体例を並べた。「複合」は「すまなさを伴う母親に対する感謝を複合的に感じている群」、「被害」は「母親に対する感謝よりも母親から被害を受けたと感じている群」、「葛藤」は「母親に対する感謝を葛藤しながら感じている群」、「素直」は「母親に対する感謝を素直に感じている群」を示している。各群の前の数字は、クラスター番号である。

みられることから、「父親に対する感謝よりも父親から被害を受けたと感じている群(被害)」と解釈された。第3クラスターは、負担をかけたことへのすまなさを感じる程度が平均値および得点可能範囲の中間値である3.00より小さく、父親に感謝しているときに感じる気持ちの一部で平均値より大きい得点がみられることから、「父親に対する感謝を素直に感じている群(素直)」と解釈された。第4クラスターは、父親に感謝しているときに感じる4種類の気持ちの得点が平均値より大きく、負担をかけたことへのすまなさを伴うことから、「すまなさを伴う父親に対する感謝を複合的に感じている群(複合)」と解釈された。

4時点で3回以上回答した90名のうち、父親との関係に未回答あるいは欠測値を有する5名を除いた計85名について、父親に対する感謝の心理状態の推移を検討した。父親に対する感謝の心理状態の推移は、母親に対する感謝と同様に、「変化なし」(38名, 44.7%)、「一方向的变化」(26名, 30.6%)、「双方向的变化」(15名, 17.6%)、「混在的变化」(6名, 7.1%)の4種類にまとめられた (Figure 2, Table 4)。

Table 3 父親に対する感謝の心理状態による回答者の分類

クラスター番号 度数 (N = 331)	1 (90)	2 (66)	3 (73)	4 (102)	全体の平均値 (SD)
援助してくれることへのうれしさ	2.66 (0.69)	1.50 (0.60)	2.62 (0.89)	3.92 (0.70)	2.81 (1.12)
生み育ててくれたことへのありがたさ	3.61 (0.73)	2.34 (0.71)	3.77 (0.85)	4.53 (0.48)	3.68 (1.03)
今の生活をしていられるのは父親のおかげだと感じる気持ち	4.28 (0.63)	2.96 (0.89)	4.35 (0.65)	4.79 (0.34)	4.19 (0.90)
負担をかけたことへのすまなさ	3.59 (0.67)	1.93 (0.89)	1.95 (0.58)	3.87 (0.69)	2.98 (1.10)
自分が苦勞しているのは父親のせいだと感じる気持ち	2.46 (0.78)	3.10 (0.94)	1.44 (0.49)	1.50 (0.58)	2.07 (0.97)
クラスター名	葛藤	被害	素直	複合	

注1) クラスター番号下の人数以外の数値は、平均得点 (SD) である (得点範囲 1.00-5.00)。各得点の平均値より大きいものを網掛けして太線で囲んだ。4 時点の各得点を投入変数としており、同一クラスターに同一回答者の異なる時点の回答が含まれている場合がある。「葛藤」は「父親に対する感謝を葛藤しながら感じている群」、「被害」は「父親に対する感謝よりも父親から被害を受けたと感じている群」、「素直」は「父親に対する感謝を素直に感じている群」、「複合」は「すまなさを伴う父親に対する感謝を複合的に感じている群」を示している。

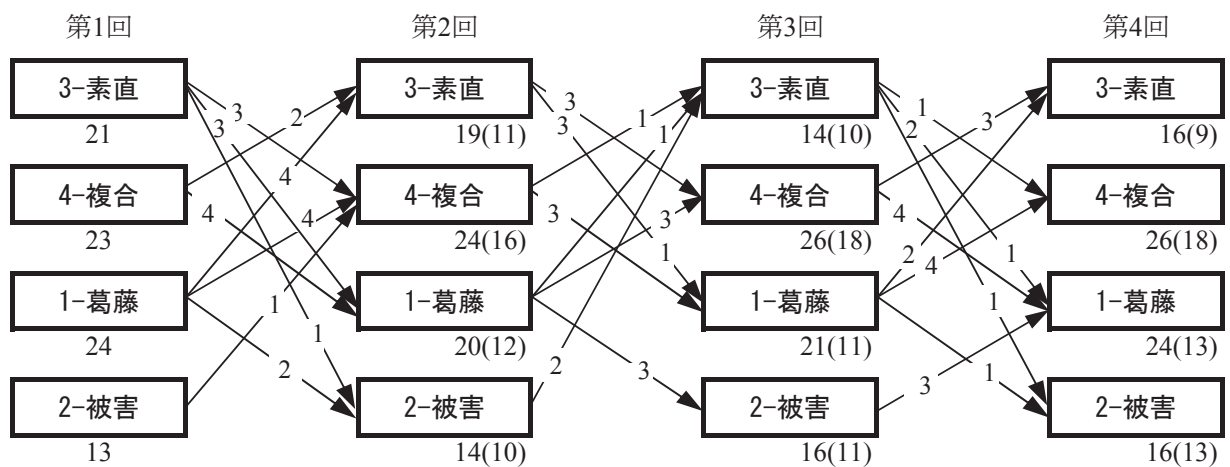


Figure 2 父親に対する感謝の心理状態の推移

注) 父親に対する感謝の心理状態の各群は、「自分が苦勞しているのは父親のせいだと感じる気持ち」の得点に基づいて並び替えている。各心理状態の下にある数値は人数、()内は前時点と同一の群に分類された人数である。矢印の数値は、分類された群が変化した人数である。同一の群間の推移を示す矢印は省略した。

Table 4 父親に対する感謝の心理状態の推移 (n=85)

カテゴリー (n, %)	概要	具体例 (n)	
変化なし (38, 44.7%)	安定した1つの群が継続する	1- 葛藤 (7) 2- 被害 (10) 3- 素直 (7) 4- 複合 (14)	
一方向的变化 (26, 30.6%)	他の群へ 一方向に移行する	1- 葛藤→2- 被害 (5) 1- 葛藤→4- 複合 (4) 3- 素直→4- 複合 (4) 3- 素直→1- 葛藤 (3)	2- 被害→1- 葛藤 (2) 4- 複合→1- 葛藤 (4) 4- 複合→3- 素直 (2) 1- 葛藤→3- 素直 (2)
双方向的变化 (15, 17.6%)	2つの群を 行きつ戻りつする	4- 複合→1- 葛藤→4- 複合 (3) 3- 素直→4- 複合→3- 素直 (3) 1- 葛藤→3- 素直→1- 葛藤 (3) 2- 被害→3- 素直→2- 被害 (1) 1- 葛藤→2- 被害→1- 葛藤 (1)	1- 葛藤→4- 複合→1- 葛藤 (2) 3- 素直→1- 葛藤→3- 素直 (1) 3- 素直→2- 被害→3- 素直 (1)
混在的变化 (6, 7.1%)	3つ以上の群が みられる	1- 葛藤・3- 素直・4- 複合 (5) 1- 葛藤・2- 被害・4- 複合 (1)	

注) 同様の心理状態に関する群で変化の順序が異なる推移の具体例を並べた。「葛藤」は「父親に対する感謝を葛藤しながら感じている群」、「被害」は「父親に対する感謝よりも父親から被害を受けたと感じている群」、「素直」は「父親に対する感謝を素直に感じている群」、「複合」は「すまなさを伴う父親に対する感謝を複合的に感じている群」を示している。各群の前の数字は、クラスター番号である。

親に対する感謝の心理状態の推移に関する特徴

母親に対する感謝の心理状態の推移と父親に対する感謝の心理状態の推移との関係を検討するために、「変化なし」、「一方向的变化」、「双方向的变化」、「混在的变化」という4種類の推移間のクロス集計をおこなった (Table 5)。クロス集計にあたっては、母親と父親の双方で親に対する感謝の心理状態の推移が分類された83名を対象とした。父親と母親の双方で、「双方向的变化」と「混在的变化」を示した回答者が少なかったことから、両方の推移をまとめた上で χ^2 検定をおこなった。分析の結果、有意な連関はみられなかった ($\chi^2(4, N=83)=5.32, p=.26$)³。

Table 5 母親に対する感謝の心理状態の推移と父親に対する感謝の心理状態の推移との関係

	父親	変化なし	一方向的变化	双方向的变化	混在的变化	合計
母親	変化なし	24 (49.0)	13 (26.5)	9 (18.4)	3 (6.1)	49 (100.0)
	一方向的变化	8 (47.1)	4 (23.5)	3 (17.6)	2 (11.8)	17 (100.0)
	双方向的变化	3 (21.4)	9 (64.3)	1 (7.1)	1 (7.1)	14 (100.0)
	混在的变化	1 (33.3)	0 (0.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	3 (100.0)
	合計	36 (43.4)	26 (31.3)	15 (18.1)	6 (7.2)	83 (100.0)

注) 数字は人数と、()内は行ごとの人数比である。父親と母親の双方で親に対する感謝の心理状態の推移が分類された83名を対象とした。

第1回で尋ねた今までの親に対する感謝が変化した体験について87名による回答があり、一人の回答を1件として、内容の類似性を基準に分類、整理した結果、「Ⅰ親子関係」、「Ⅱ人生の節目」、「Ⅲ社会とのつながり」、「Ⅳ自分の成長」という4種類の体験が見いだされた。「Ⅰ親子関係」は23名の回答が得られ、「1-困難時の支え」(7名)、「2-経済的支援」(6名)、「3-親による配慮」(4名)、「4-親との思い出」(2名)、「5-親による尊重」(2名)、「6-親子間の関係調整」(1名)、「7-家事の手伝い」(1名)という7種類のカテゴリーが含まれている。「Ⅱ人生の節目」は20名の回答が得られ、「8-受験」(2名)、「9-進学」(5名)、「10-

成人」（2名）、「11-就職活動」（1名）、「12-自分の病気や事故」（5名）、「13-親の病気や転職」（3名）、「14-両親の離婚」（2名）という7種類のカテゴリーが含まれている。「Ⅲ社会とのつながり」は5名の回答が得られ、「15-アルバイト」（4名）と「16-奨学金」（1名）という2種類のカテゴリーが含まれている。「Ⅳ自分の成長」は1カテゴリーであり、5名の回答が得られた。その他に「思い浮かばない」（33名）、「書きたくない」（1名）という回答がみられた。

前回の調査時期からの親への感謝の気持ちに変化した体験については、第2回は85名中35名（41.2%）、第3回は81名中20名（24.7%）、第4回は88名中25名（28.4%）の回答が得られた。回答された内容は、第1回で尋ねた今までの親に対する感謝が変化した体験とおおよそ同様であった。親に対する感謝の心理状態による群間の推移に注目すると、大きく次の3種類の体験がみられた。第1に、親に対する感謝の心理状態による群が推移する前後で、親に対する感謝の気持ちが強くなったという体験である。たとえば、「a. 就職活動が本格的に始まった時。b. 感謝の気持ちが強くなった。c. 就職活動には、お金がかかってしまうから。d. 早く就職を決めて親を安心させたいと思う。」（第2回；母親：複合→複合；父親：葛藤→複合）⁴、「a. 毎日お弁当を作ってくれる。自分のために働いてくれる。b. あたり前からとてもありがたいと感じるようになった。c. 自分もバイトを行うようになって、働く事の大変さを知ったから。d. 働いているのに世話をさせて申し訳なく思った。」（第3回；母親：素直→複合；父親：複合→複合）などの回答があった。第2に、親に対する感謝の心理状態による群が推移する前後で、感謝の気持ちが弱まったという体験である。たとえば、「a. 父親に対して、嫌な気持ちが増した。b. 嫌な気持ちが増した。c. 自分の意見を聞いてくれない。私の意見をいうと、ケンカになる。d. 父親としゃべるのがますます嫌になった。」（第4回；母親：葛藤→葛藤；父親：葛藤→被害）、「a. 親に怒られたとき（「育ててやったんだ」みたいな恩着せがましい感じ）。b. ちょっと減った。c. 理不尽？だと思った。d. イラついた。」（第4回；母親：葛藤→被害；父親：葛藤→葛藤）。第3に、親に対する感謝の心理状態による群間の変化はみられないが、親に対する感謝の気持ちに変化があったという体験である。たとえば、「a. 入院していた母が退院して元気になってくれたこと。b. 深く感謝するようになった。c. あたり前だった“親”という存在を失ってしまうかもしれないという恐怖が生まれたから。d. 「親がいなくなったら」ということを考えて怖くなったりすることが多くなった。」（第3回；母親：複合→複合；父親：複合→複合）、「a. 父親と、就職活動について相談する機会も増えた。b. より感謝の気持ちが増えたように思う。c. 不安があるから、就活などで。d. 経験しているのとしてないのとはちがうなと思った。」（第4回；母親：複合→複合；父親：複合→複合）などがみられた。

考察

母親に対する感謝の心理状態および父親に対する感謝の心理状態について、池田（2018）と同様に解釈できる4クラスターに回答者がそれぞれ分類された（Table 1、3）。このことから、池田（2018）で見いだされた4種類のクラスターは安定した分類であることが指摘できる。したがって、母親と父親の双方について、青年期における親に対する感謝の心理状態を理解する上で、親に対する感謝を素直に感じている群、すまなさを伴う親に対する感謝を複合的に感じている群、親に対する感謝を葛藤しながら感じている群、親に対する感謝よりも親から被害を受けたと感じている群という4種類に分類することが有効であると考えられた。

分類された親に対する感謝の心理状態の推移は、母親と父親の双方で、「変化なし」、「一方向的変化」、「双方向的変化」、「混在的变化」の4種類にまとめられた（Figure 1、2；Table 2、4）。母親に対する感

謝の心理状態の推移を分析した88名のうち52名（59.1%）、父親に対する感謝の心理状態の推移を分析した85名のうち38名（44.7%）が「変化なし」であり、1年間にわたる親に対する感謝の心理状態に変化がみられないことが示唆された。一方で、おおよそ4割から5割の女子青年は、1年間で親に対する感謝の心理状態に揺れ動きがみられるといえる。ボスマ・クンネン（杉村報告 2015）は、“ある人にとっては何らかのステイタスはどうしても行くことができないステイタスであり、ある人には絶対このステイタスからは逃れられないというステイタスがある”とし、アトラクター、自己組織化という視点から説明している（p.225）。ダイナミック・システムズの視点を参考にとすると、女子青年の親に対する感謝の心理状態は普段の生活の中で揺れ動きながらも、各クラスター群で示された安定した状態に立ち戻るということが考えられる。ただし、この安定性には個人差がみられ、「一方向的変化」、「双方向的変化」、「混在的变化」のように1年間で変動している場合があることも指摘できる。さらに、アトラクターの外に出て起る持続的变化として、“もう今までのパターンではどうにも対処できない”すなわち“全ての要素がアクティブな状態になって、変化が本当に起こる”ということも指摘されている（ボスマ・クンネン，杉村報告 2015, p.224）。

また、今回の分析結果では、母親と父親の双方について、「すまなさを伴う親に対する感謝を複合的に感じている群（複合）」から「親に対する感謝よりも親から被害を受けたと感じている群（被害）」への推移はみられなかった。内観法では“懺悔の極が感謝の極につらなるような体験”^{きわみ}といわれるように、その洞察の中心には“自己の罪と他者の愛の自覚”がある（三木，1976，p.66，p.214）。村瀬（1996）も内観における自己省察について、“他者の「おかげ」で生きている自分、つまり他者に大きな負い目をもち、他者を傷つけ苦しめる罪を犯してきた自分を、想起された具体的体験にもとづいて、しっかりと自覚させる働きをもつ”と論じている（p.165）。「すまなさを伴う親に対する感謝を複合的に感じている群（複合）」では、親へ負担をかけたことへのすまなさを実感することをおして、自分が苦労しているのは親のせいだと感じる気持ちが低減し不可逆的な変化がみられるという可能性も指摘できる。

母親に対する感謝の心理状態の推移と父親に対する感謝の心理状態の推移との間には、有意な連関はみられなかった（Table 5）。このことは、母親に対する感謝の心理状態に変化がみられても父親に対する感謝の心理状態に変化がみられない場合があることを示しており、父親に対する感謝の心理状態に変化がみられた場合も同様であるといえる。したがって、母親と父親で親に対する感謝の心理状態の変化過程は異なると考えられる。また、親への感謝の気持ちが変化した体験について、「Ⅰ親子関係」、「Ⅱ人生の節目」、「Ⅲ社会とのつながり」、「Ⅳ自分の成長」という4種類の体験が見いだされた。日本人の母の観念を分析した山村（1971）は、「子は母の苦労を、ともするとあたりまえのことに思う」ことから《罪の意識としての母》の観念への転換が起こると指摘する。その転換の契機として、山村（1971）は、子自身の結婚、母の死、母の病気、子を育てること、子自身が死に直面したことという5つの例を挙げ、“何らかの形で、母と離れることが重要な契機となっている”と論じている（p.196）。「Ⅱ人生の節目」に含まれる「9-進学」、「12-自分の病気や事故」、「13-親の病気や転職」、「14-両親の離婚」などは、山村（1971）が指摘するように、親と離れることが重要な契機になっていると考えられる。加えて、「Ⅲ社会とのつながり」や「Ⅳ自分の成長」をとおして青年が親と適度な心理的距離を保つようになることで、親との関係のとらえ方が変化し親に対する感謝を実感することにつながるとも指摘できる。また、親との結びつきと親からの分離の両立が青年期の親からの自立にとって重要であることが論じられている（Grotevant & Cooper, 1985, 1986; Santrock, 2012）ように、「Ⅰ親子関係」を中心に親との結びつきを改めて実感する体験もみられるといえる。

以上より、女子青年の親に対する感謝の心理状態は普段の生活の中で揺れ動きながらも、親に対する感謝を素直に感じている群、すまなさを伴う親に対する感謝を複合的に感じている群、親に対する感謝を葛藤しながら感じている群、親に対する感謝よりも親から被害を受けたと感じている群のような安定した状態に立ち戻るが、この安定性には個人差があり「一方向的变化」、「双方向的变化」、「混在的变化」のように1年間で変動している場合があることも示唆された。本研究における今後の課題と展望を以下の3点にまとめる。第1に、調査回答者の拡充である。本研究で回答を分析した女子大学生に加えて、男性や学生以外を含めた幅広い年齢層で青年期をとおした調査を実施する必要がある。第2に、DSAで注目される多水準の時間単位の相互作用を考慮することである。本研究では1年間にわたる4時点の変化を扱ったが、マイクロレベルならびにマクロレベルとしての長期間の親に対する感謝の心理状態の変化とそれらの相互作用を検討することが有用である。たとえば、日常生活での親に対する感謝の積み重ねが、本研究で回答がみられた進学、就職活動、自分や親の病気などを契機とする親に対する感謝の変化とどのように関係するのかという、親に対する感謝の発達と日常的な親に対する感謝との連続性も重要であろう。第3に、青年が親に対する感謝をふり返ることの意味を明らかにすることである。本研究で実施した調査は、1年間に4時点で、回答者が自身の親子関係を親に対する感謝を中心にふり返る機会となっていたと位置づけることもできる。青年が自身の親子関係をふり返ること自体が、親に対する感謝の心理状態へどのような影響を与えるかについて明らかにすることが課題である。

付記

本研究は日本青年心理学会第24回大会（池田，2016）、日本発達心理学会第28回大会（池田，2017）で発表した研究成果の一部を再分析したものです。各学会で貴重なご意見をくださった先生方、調査へ協力いただいた学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

註

- 1: ボスマ・クンネン（杉村報告 2015）は、ダイナミック・システムズ・アプローチの重要な概念について、以下のとおり解説している（pp.223-225）。「反復性」とは、“発達のステップがとられるごとに全体のシステムが変わるという意味”であり“システムが変わると、それがまた次のステップの出発点になっているということ”である。「非線形」とは、“1つの変数がシステム全体に影響し、影響を受けるというもの”である。「自己組織化」とは、部分部分の“それぞれが相互作用をするけれども、結果、ネットワークが安定の状態に戻るということ”である。そして、「多様な時間のスケール」として、分や1時間などのマイクロのレベル、メゾ、マクロなどの数カ月、1年間のレベルがあり、“心理学的な発達のプロセスのメカニズムを理解するときには、これらの違った時系列的なスケールが相互にどうやって関連をしながら機能するのか”を考える必要があることを論じている。
- 2: 調査では、池田（2018）に基づいて選定した父親との10種類のかかわり方ならびに母親との10種類のかかわり方を尋ねる各30項目についても5件法（「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」）で回答を求めたが、本研究では取りあげない。
- 3: χ^2 検定の分析結果については、9セルのうち2セル（22.2%）の期待度数が5未満であり、留意が必要である。
- 4: 体験の例示におけるアルファベットは、前回の調査時期からの親への感謝の気持ちに変化した体験について、a.出来事、b.変化の内容、c.変化した理由、d.その体験をとおして感じたことや考えたことへの回答に対応している。“（第2回；母親：複合→複合；父親：葛藤→複合）”という記載は、「第2回」調査時の回答であり、その前後（ここでは第1回から第2回）にかけて、母親に対する感謝の心理状態について「複合」から「複合」、父親に対する感謝の心理状態について「葛藤」から「複合」というクラスター群であったことを示している。以下、同様である。

文献

- ボスマ, H., クンネン, S. 杉村和美報告. 2014年度国際ワークショップ・公開講演会報告 青年期のアイデンティティ発達研究へのダイナミック・システムズ・アプローチ. 発達研究：発達科学研究教育センター紀要. 2015, 29, p.217-232.
- Froh, J. J.; Yurkewicz, C.; Kashdan, T. B. Gratitude and subjective well-being in early adolescence: Examining gender differences. *Journal of Adolescence*. 2009, 32, p.633-650.

- Grotevant, H. D.; Cooper, C. R. Patterns of interaction in family relationships and the development of Identity exploration in adolescence. *Child Development*. 1985, 56, p.415-428.
- Grotevant, H. D.; Cooper, C. R. Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*. 1986, 29, p.82-100.
- 平木典子. “親と子の心の絆.” 現代のエスプリ別冊 揺らぐ家族と心の健康シリーズ2 親子の心理とウェルネス—21世紀の幸福な親子関係を目指して. 岡堂哲雄編. 至文堂, 1994, p.9-17.
- 池田幸恭. 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析. *教育心理学研究*. 2006, 54, p.487-497.
- 池田幸恭. 成人期を中心とした親に対する感謝の検討. *和洋女子大学紀要*. 2014, 54, p.75-85.
- 池田幸恭. 女子青年における母親に対する感謝の心理状態の短期縦断的検討. *日本青年心理学会大会発表論文集*. 2016, 24, p.34-35.
- 池田幸恭. 女子青年における父親に対する感謝の心理状態の短期縦断的検討. *日本発達心理学会大会発表論文集*. 2017, 28, p.209.
- 池田幸恭. 母親とのかかわり方からみた青年期における母親に対する感謝の心理状態の特徴. *教育心理学研究*. 2018, 66, p.225-240.
- Kunnen, S.; van Geert, P. “General characteristics of a dynamic systems approach.” A dynamic systems approach to adolescent development. Kunnen, S., ed. Psychology Press, 2012, p.15-34.
- 三木善彦. 内観療法入門：日本的自己探求の世界. 創元社, 1976, 332p.
- 三宅和夫, 陳省仁, 氏家達夫. 「個の理解」をめざす発達研究. 有斐閣, 2004, 174p.
- 村瀬孝雄. 自己の臨床心理学3 内観 理論と文化関連性. 誠信書房, 1996, 342p.
- 西平直喜. 成人になること：生育史心理学から. 東京大学出版会, 1990, 254p.
- Santrock, J. W. *Adolescence* (14th ed.). New York: McGraw-Hill, 2012, 618p.
- 杉村和美. “ダイナミック・システムズ・セオリー.” 後藤宗理, 二宮克美, 高木秀明, 大野久, 白井利明, 平石賢二, 佐藤有耕, 若松養亮編. 新・青年心理学ハンドブック. 福村出版, 2014, p.109.
- Thelen, E.; Smith, L. A dynamic systems approach to the development of cognition and action. Massachusetts Institute of Technology, 1994. (テーレン, E., スミス, L. 小島康次監訳. 高橋義信, 丸山慎, 宮内洋, 杉村伸一郎訳. 発達へのダイナミックシステム・アプローチ：認知と行為の発生プロセスとメカニズム. 新曜社, 2018, 455p.)
- 山村賢明. 日本人と母. 東洋館出版, 1971, 253p.

池田 幸恭 (和洋女子大学 人文学部 心理学科 准教授)

(2020年11月17日受理)